『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

私の歩んだ道

近藤徹称

只今、蜂屋学長先生からご紹介のありましたように、私は知恩院の山内にございます尼僧道場の道場長をいたしております。道場には、ちょうど皆様と同じくらいの年代、つまり高校を卒業してすぐにお見えになる方もございます。また、ＯＬであった方とか、あるいは家庭の主婦であった方とか、いろいろな方が齢をとられてからお見えになっております。しかし今日は道場のお話をするためにまいったのではございませんので、私の若い日の求道のことと申しますか、皆様方くらい、あるいはもう少し上くらいの頃の私のことを少しお話ししてみようかと思います。若い日の私がどのように動いたかを話すことによって、少しでも皆さんの生き方に

示唆を与えることができれば、これほどうれしいことはございません。あるいはなんのとりえもないお話で終わってしまうかもしれませんが、どうかしばらくの間ご静聴をお願いいたします。

実は私は、年齢からもおわかりのように、戦前に教育を受けた者でございます。小学校の時に満州事変が始まりました。女学校の時には日中事変が始まりました。私は日本女子大の卒業でございますが、女子大に入りますと、いわゆる太平洋戦争が始まりました。私たちが入った頃は、若さのゆえでございましょうか、なんの暗さも感じませんでした。上級生が着物に袴姿で迎えてくれましたが、はじめ、これは先生だろうか学生さんだろうかと、小首をかしげたほどでございました。四年生と申しますと二十一、二歳のはずですが、本当に落ち着いておられて、先生ではないかと思ったくらいでした。そういう着物姿の時代でございました。

私は国文科でしたので、上級生から奥の細道を一緒に辿ろうではないかと誘われると、春休み全部を使って上級生について奥の細道を歩いたりしました。また、九州大学の先生のお嬢さんが九州へ一緒に行きませんかとおっしゃるので、夏休み全部を使って九州のあちこちを回って歩いたりしました。冬には富士五湖へ行ってスケートをするとか、佐藤春夫の自作の詩の朗

読があるといえば、夜こっそりと寮舎を抜け出して聞きに行くとか、あるいは築地の小劇場へ文学座の公演を見に行くとか、のん気なことをしておりました。また、歌舞伎とか文楽に非常に凝っている学生さんもいて、そういうところへも出入りしました。

私の入った女子大はキリスト教系の大学で、成瀬仁蔵先生というクリスチャンが創められた学校です。寮舎では夜必ず、皆で賛美歌を歌ってから寝みます。そこに来ておられる学生さんも、クリスチャンが多い。寮舎におられる方の四分の一か五分の一は、日曜ごとに教会へ行かれます。私はそれまで、キリスト教のそういう雰囲気に触れたことが全くございませんでしたし、あまり関心もありませんでしたので、教会へ行ったことはございません。賛美歌を歌っている時、これはなかなかいいものだなあということだけは感じました。そんなことでのん気に過ごしておりました。

国文学を専攻される方には、例えば真山青果のお嬢さんの真山美保さんのように、はじめから演劇の仕事をするということで入学され、卒業後も一座をひきいて演出をしてこられた方もあります。去年も南座で「坂本龍馬」を演出されました。それから、橋田寿賀子さんも同窓ですが、あの方は今「春日の局」という大河ドラマを書いておられます。文学部はそのように多

士済々で、みんなはっきりとした目標を持って入ってきておられました。ところが私などは、本当は英文科へ行きたいけれども、英語はそれほどの力がないし、まあ国文科へでも行こうかと、つまり無難な道を選んで行ったということで、これといったはっきりした目標がなかったのです。

そして昭和十八年、戦争がいよいよ熾烈になってきまして、学徒出陣。大学の学生が、学生服のままで鉄砲をかついで明治神宮外苑を行進していく。私たち女子大生はそれを見送るために、雨のそぼ降る中を神宮外苑にまいりました。その時の光景は目に焼きついていて、いまだに忘れられません。

その後女子学生だけが学園でのうのうと勉強をしていることはあり得ない、われわれも働かなくてはいけないということで、学徒動員で第一造兵廠へ出かけることになりました。そこで私は倉庫係に配属されました。その上には主計少佐をはじめ、軍隊の幹部階級の方たちがおられました。その中の主計少佐の森さんという方が私たちの控え室に来て言われるには、「あなたたちに来ていただいて申しわけないのだけれども、実をいうと倉庫の中はすでに空っぽです。こんなこと大きな声では申せませんが、入ってくる物もないし、出す物もない。ですから目の

前に敗戦が見えております。折角来ていただいたのに、なんの仕事もしていただけない。しばらく遊んでいてください」と。私たちはその時、そんなに倉庫に資財がないとわかっていながら、なぜ戦争を続けていかなくてはいけないのかと、本当に疑問に思いました。上の人たちは物がないということくらいわかっているはずなのに、どうして戦争をやめることができないのかと、それを聞いた途端に、本当に腹が立つといいますか、情けないといいますか、どうしたらいいのだろうという思いがありました。

しかし、とにかくその当時は挙国一致、そんなことを言う隙間も与えられないような状況でございまして、私たちも仕方なく時間つぶしをいたしておりました。そして昭和十九年の秋に、緊急卒業というかたちで、むりやりに卒業させられました。私たちが卒業した直後から、東京にはもう空襲が始まりましたので、東京に空襲があれば学生の処置に困ると思われたのでしょう、早く帰れ、早く帰れといわれて、私たちはみんな国元へ帰りました。後になって、女学校時代のお友だちで医大へ進まれた方に「あなた方はどうしておられたのですか」とたずねてみました。すると、「私たちはそれこそ戦火の中をくぐって、負傷者の救急にあたったり、亡くなった方の後始末をさせられたり、それは大変だったのですよ」と言われて、やはり医学部の

学生さんは違うのだなあと思ったことでした。私たちのような役に立たない人間はさっさと帰らされたけれども、医学部の学生さんは、それこそ戦火の中をそのようにして働いてくださったようです。

私は卒業したものの、さてどうしようかと思っていた矢先に、たまたま京都の家政女学校から来ないかという連絡を頂きましたので、こちらへまいりました。ところがこちらも学徒動員で、太秦のほうの工場へついて行ってその監督をするということで、授業は全然ありませんでした。そうこうするうち、昭和二十年に敗戦になりました。その直前に、私が生まれた土地は戦火のために全部焼けてしまいました。その時家に帰ってみましたが、昔大きな家があったところも、あるいは小さな家があったところも、それこそ貧富の差もなしに、一面焼け野原になっていました。その時は、こんな状態が本当に現実にあるのだなあという驚きで目を見張っておりました。

敗戦になって、何も整わないままいよいよ授業が始まりましたが、その頃になって私は、女学校の先生をするために大学へ行ったわけでもないし、何かもう少し勉強をしたいものだと思いました。つまり、大学へは行ったけれども、学徒動員に駆り出され、学業半ばで、中途半端

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

のままで卒業だけさせられて、学力はついていないし、もう一度勉強したいという気持ちが起こったのです。

さて、それでは何をするか。とにかく敗戦という状態の中で、もう少し生きるということと直接結びついた学問がないものだろうかと考えてみたのです。私が子どもの頃、母はよく禅寺、それもいわゆる雲水さんの沢山おられる専門道場へ坐禅に行っていました。朝暗いうちから起きて電車に乗って禅寺へ行き、坐禅をして、朝がゆをお呼ばれして、家に帰ってきて、それから「さあ起きなさいよ」と子どもたちを起こす、ということがよくありました。私は末っ子で小さいものですから、母親に連れられてその禅寺の老師様のところに一緒に行ったことがございます。隠寮と申しまして、一番奥のお部屋ですが、そこに阿羅漢様のような老師がおられまして、その方がお茶を点ててふるまってくださいました。

その禅寺の風景が思い出されてきたのです。あの広い掃き清められた林の中の小道をずっと入っていくと、お寺の建物がある。床がピカピカに磨いてある。何かすがすがしい感じがする。そういうことが思い出されてきました。自分にはそういう経験があるのだから、仏教学を学べばそういう境地に達することができるかもしれないと思いました。それでその頃は尼衆学校と

いっていましたが、そこにとびこみました。そこにはちょうど京大を出られた藤吉慈海先生がおられて、私がたまたま大学を出ているからでしょうか、「京都大学の久松真一先生が主宰しておられる学道道場というものがあって、そこで毎週坐禅をしているから行かないか」と誘ってくださいました。

私は坐禅と聞いた時に、母親がしていた坐禅というものを私もしてみようと思い、ついて行きました。北野の選仏寺というお寺だったのですが、入ると空気がピーンと張りつめているのです。真剣勝負の場所に入ったように、物音一つしない。シーンと静まり返って、黒い影法師だけが座っている。そういう状態の中に入って行きました。さすがに禅だなあと思いまして、私も一緒になって座りました。

その頃はまだ京都大学学道道場という名前で、ほとんどが京大の学生さんでした。哲学と仏教学をやっている人たちが大体三分の二くらいを占めていまして、そのほかに歴史学とか医学、数学、農学といった学問をしておられる方たちも混じっておられました。多分皆さんもテレビでご覧になっていると思うのですが、禅寺では警策という戒めの杖のようなものを持って回ります。久松先生もそれを持ってお回りになる。白い足袋が目の前までさっさっと来る。それが

お能の舞台のような、本当にきれいな歩き方をされる。私は目を半眼にして、半畳くらい先に目を落としている。そこを歩いておられる先生のその歩き方を見て、これはただならぬ人だなあと思っていました。

その後、学道道場には毎週、休まず通っていました。そこでは先に閑座実究と申しまして、お線香が一本燃えつきるくらいの間、大体二時間くらいですが、その間坐禅をします。そしてその後、論究といって、その座について、あるいはもっとそれ以上のいろいろなことについて論究をします。それが大体一時間。ですから六時から始まって九時に終わるはずなのですが、皆がその論究に熱中して長引きますと、だんだん時間が延びて、ついに十二時になってしまうこともあり、市電がなくなって、しようがないから知恩院まで歩いて帰るということもございました。

その頃の本当に熱心な人々の中に、北原白秋の息子さんで、北原隆太郎という方がおられました。この方は詩人の息子さんですから純粋な方で、久松先生が非常に目をかけておられました。北原さんは週に一回の学道道場では物足りない、一週間くらい期間を区切ってその間毎日坐禅をするという別時学道を始めてほしいと言われました。それで、禅宗では接心というのが

ありますが、それを別時学道というかたちにして始められました。それが夏休みに始まりまして、私も参加しました。それは妙心寺の中の東海庵というお寺で行われていました。

私は仏教を勉強しようと思ったとたんに、そういう雰囲気の中に入り込むことができました。そこで論究されたことで私がはっきり覚えていることは、最初にまいりました時に哲学科の上田泰治さんが「真仏の所在」ということでお話をしておられたことです。本当の仏様はどこにおられるのかということです。仏様といいますと、土で造った仏様とか、あるいは木で彫った仏様とか、金で鋳造された仏様とか、いろいろな形の仏様を思いますが、その時に「泥仏水を渡らず　木仏火を渡らず　金仏炉を渡らず　真仏何処にいましますや」という言葉が出てまいりました。泥仏というのは土で造った仏。それは水の中に入れれば溶けてしまいます。木の仏様なら、火に投げ入れれば焼けてしまいます。金で鋳た仏様なら、炉の中に入れればまた形がなくなってしまいます。では本当の仏様はどこにあるのか。そういうことを論究しておられました。

あるいは阿部正雄という先生は、真宗の信仰を持った方で、この方も哲学科でしたが、『歎異抄』を引用して論述されまして、先生がそれを鋭く批判していかれるという場面もござ

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

いました。私はそこで随分、耳からの学問をさせていただきました。

それから二年くらい経ちました時、久松先生がちょうど仏教学と宗教学、両方の教授をしておられましたので、先生のお話をもう少しまとまってお聴きしたいと思い、先生に「聴講生になりたいのですが」とお伺いしました。先生は「一度試験を受けてごらんなさい」と言ってくださり、その結果、宗教学の授業に入れていただきました。その後二年間、先生のお話を寸分聞き逃すまいと思い、一生懸命にお聴きしました。その頃は助教授の先生も、あるいはOBの方たちも来ておられて、みんないつも張りつめた気持ちで、先生の講義を承っておりました。先生は物静かに、ゆっくりとお話しになりますので、講義のノートは非常にとりやすいでした。いつも着物を着て、袴をはいておられて、その態度は実に落ち着いておられました。そして綿密、厳密という感じの方でした。

ある方が「久松真一先生は、なんだか歌舞伎俳優みたいですね」とおっしゃいましたが、私は先生はお茶人さんだと思いました。先生は道場のほかにもう一つ心茶会という会を主宰しておられました。裏千家で、学生を集めてまず坐禅をして、その後、ご自分でお作りになった茶道の心、茶道の中心的な精神を詠いあげた短い文章を学生に唱えさせて、その後でお茶のお点

前をする。それには裏千家の宗匠も混じって一緒にされるということで、本当に厳しい、いわゆる自己鍛練のためのお茶をしておられました。そういう先生ですから、生活全体がお茶で出来ていたわけです。

先生は、妙心寺の山内にある春光院というお寺の奥のほうのお部屋を借りておられました。面会日が日曜日でした。人に連れられてそこに行きますと、まず素朴なくぐり戸がございます。それを開けて入りますと、苔庭があります。踏み石を渡って行きますと、縁側へ出ます。縁側の上には小さな風鈴が下がっていまして、それを鳴らしますと、先生が出てこられます。一度一人でお伺いしたことがありました。その時は先生が「どうぞお上がりください」とおっしゃって、わざわざご自分でお点前をしてお茶を点ててくださり、本当に恐縮したことを覚えております。

この久松真一先生は何を話されたのか。どういうことを私たちに教えられたのか。それを若い方たちにお伝えすることは本当にむずかしいし、私の言葉ではなかなか言いきれません。かみ砕いて言えば言うほどむずかしいのですが、先生の教えの第一番は、どうしても承認しなければならないことが我々、自己の命にはあるのだ、ということでした。我々の命には、承認し

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

なければならないこと、どうしてもはっきりと自分で自覚しなければならないものがある。それに目覚めなさい、と。それはどういうことかといいますと、言葉でいえば本当の自分ということなのです。私たちは実をいうと、生きていながら、そしてそれに出会いながら、そのことを本当には自覚していないのです。そういう日常的なあり方そのものを批判する。あるいは、自分というものを自覚するといえば意識的にすぐ、自覚する自分と自覚される自分という二つのものに分かれてしまって、一つにならない。そういう状態を一つにしなければならない、ということです。

つまり自覚されるべき自分、自覚する自分、それがどこで一つになるか。それが坐禅というものでなれるのです。坐禅をしていますと、私という確かに形あるものが、だんだんと手の感覚がなくなるようにずっと静まってきまして、普段、私が持っている意識の働きと自分の肉体が一つになっていき、そしてそこで、身体はあるのだけれどもそれがないような状態というのか、世界の中にずっと自分が広がっていってしまうという状態になるのです。自分が自分でありながら、自分でない。それは禅がそういう体験をしやすい状態にあるからでしょうが、私はそういう体験をして、なんとなく先生の言われることがわかるような気がしました。

それをはっきり自覚しますと、全人類の立場に立つことができるようになります。全人類といっても私は私、あなたはあなた、あの人はあの人という、個々別々の人たちを全部まとめてという立場からの全人類ではありません。逆に自分というものに目覚めた、その目覚めの原点、そこが全人類の原点でもある。それが自覚といわれるところなのです。先生は「覚の宗教」ということをおっしゃって、あらゆる立場を鋭く批判しておられます。

先生は第二に自律ということをおっしゃっています。「じりつ」という言葉には、二つの文字があります。まず、自ら立つ、自分の足で立つと書く自立があります。それからもう一つは自ら律するという自律。自分で自分を律しながら立てていく。これはオートノミーとか、ヘテロノミーというドイツ語から訳された言葉のようですが、とにかく自律でなくてはならない。他律的な生き方、つまり、他の絶対者を立てて、そしてその支配下に置かれるというような、例えばキリスト教のように神が宇宙を創造し、神の権威によってすべての人が支配されるという、創造主と創造された被造物との関係の中で人間をみていくという生き方はだめなのです。どこまでも自律でなくてはいけない。

その自律は、自分勝手な自律はもちろん許されるものではない。キリスト教では「自分を愛

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

するように隣人を愛しなさい」といいます。このように、とかく自分を中心にしていくとエゴイズムになります。自己中心になって、他人のことはかまわない。他人がどれだけ迷惑を受けようとも、それに対して見向きもしない。これは現代の風潮かもしれません。民主主義をどうも自己中心の立場と誤って受け取っているのではないかと思われる節があるのですが、そういうのは全く問題外です。そうではなくて、まず自律をする。自分勝手な、あるいは独断的な生き方をしている自律ではなくて、他律と自律が一つになったところに立たなければいけない。それが第二番目の教えです。

そして第三番目に、その自律というものが、偏見とかあるいは主観的なものであってはいけない。客観性、普遍性を持ったものでなければならない、と言われます。つまり学問的にはっきりと裏付けができなければいけない。そういう立場を先生は強調しておられたと思います。

これは非常にむずかしいことですが、もっとやさしい言葉でいえば、いまから十年くらい前に、ウーマン・リブレーション、つまりウーマンリブということが日本でも随分自覚されるようになりまして、女性学という学問を開講している女子大もあるようでございますが、そういう場合に自立、自分で立つということを強調されます。京大を出られた冨士谷あつ子さんが私

の家の近くにおられて、京大の楽友会館で女性学研究会を開くといわれるので、私も関心があって出席したことがございます。その時に話されたのは、経済的な自立、あるいは職場における自立ということでした。もう一つ精神的な話は出なくて、冨士谷さんも「まだこれは初歩的な段階ですので、見苦しいところをお見せして」と言っておられました。

自立というと、男性からの自立が問題になって、経済的な給料の面とか、あるいは扱いの面とかいうことで、とかく男子を対象にしてそこからの自立をいいます。それは過渡期としては結構なことだと思います。というのは、女性はどちらかというと依頼心が強くて、誰かの指示に従って動くということがあるからです。これは日本の社会情勢、長い間の習慣的なものの影響もあるのでしょうが、今までそういう傾向が強かったようです。ただ、そこにいつまでもとどまっていては、あまりにも浅い、現象面だけの問題になります。そうではなくて、男女に関係なく、人間として自立するということはどういうことなのか、それを考えてみる必要があると思うのです。本当の意味で自立するということは、自分を律することだと思うのです。心弱くてふらふらしていてできることではありません。どんなことが起こってこようとも、すべてそれを自分の責任において引き受けて、そしてそれを処理していく。それだけの覚悟がないと

だめなのです。

とくに女子学生の場合、自立ということを、よく考えていただきたいと思うのです。学問なら学問をして、それによって自分でなければできないことで自分というものをどんどん伸ばして、成長していく、あるいは豊かにしていく。そういうことだけに気を取られていますと、周りのことが見えません。そうではなくて、自分が成長していくのと同時に、他の人たちもすべて自分と同じように伸びていってほしいと願う。他に対する思いやりというのでしょうか、立場を変えて考えることのできる自分、相手の立場に立って考えることのできる自分、そういう自分を形成することが、本当の意味で自分を主体的に自覚し、行動していくということなのです。それができなければ、いくら勉強が出来るとか、偏差値がどうとか、どういう大学に入れたとかいうことを言っていても、それは本当の意味で自分を確立したことにはならないのです。

自と他の問題というのは非常にむずかしい。とくに現代のように社会的にいろいろな問題が起こってきますと、なかなか簡単には言い切れないことも出てきております。例えば「自分のことは自分が一番よく知っています。だから私のことは放っておいてください。他人のことを構わないでください」と言う方がおられます。しかし、そういう方に限って友だち付きあいが

うまくいかなかったり、いろいろな悩みを持っていたりしておられます。

なぜそうなるかというと、自分がどういうものかということがわからないからです。自分というものがわからなければ、当然自分の思うままに欲望を延長させていく、という生き方になってしまいます。そうすると、周囲は非常に迷惑を蒙ります。その迷惑がわからないから、いつまでもそれを続けていく。そうすると友だちは、あの人とお付きあいをしていてもただ利用されるばかりだから、あるいは、自分の都合のいい時しか付きあわない人なのだから、友だちになるのをやめようということになり、だんだん友だち付きあい、人間関係が狭くなっていくのです。

私どもの道場に来られる方の中にも、人間付きあい、友だち付きあいがうまくいかないと言われる方があります。そういう方を見ていると、やはりわがままなのです。今は一人っ子が多いし、あらゆるものが飽満状態にある平和な時代ですから、そういうわがままが通ります。ですから自然にそうなってしまうということは考えられますが、そうなれば余計のこと、もう少し自分というものを律して、これでいいのか、これでいいのかという、自己反省をしてほしいと思うのです。いくら高度成長をして、日本が経済大国になっても、そこにいる人間の一人一

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

人が本当に自主的に自分を律しながら生きていける、そういう人の集まりでないと、他国から必ず批判されて、日本はつまらない国だといわれるに違いありません。基本は人間なのです。そこに動いている人たち、生きている人たち、それがどういう人であるかということによって、国も評価されてくるのです。そういうことがないと、ただ器だけが立派であって中にいる人間がみんなエゴイズムの固まり、ということになります。そうなれば、それは外側が立派なだけに、よけいにみすぼらしく見えます。

最も基本的なことは、まずエゴイズムがどういうものなのか、そして自分はそのエゴを拡張しているのではないか、エゴだけをどんどん拡張させていっているのではないか、他人に迷惑をかけているのではないか、本当に他人のことを思っているのだろうか、そういうことをよく反省してみること、出発はまずそこからだと思います。自分が厳しく自分を律していくことができなければ、何をやっても、それは本当の基礎が出来ていない上に建てる楼閣のようなもので、本当のものにはならないと思うのです。

私は一度、北原隆太郎さんと奈良で、ある会場へ行ったことがございました。そこで急に「十分ずつでいいから、ちょっとお話を」と言われまして、先に北原さんがお話をされました。

その時の言葉ですが、「私は若い頃、父の北原白秋が、じっとたたずんで苦吟をしている、苦しんで言葉を探そうとしている、そういう後姿を見たことがあります。私はまだ若くてその心境はよくわからなかったけれども、今にして思うと、父は一つの言葉、そのものを表すためにどうしてもその言葉でなければならないような言葉、それを探し出すために、じっとつっ立って考え込んでいたのだと思う。詩というものはそういうものなのですね」と言われたのを覚えております。

詩人が詩を生み出すのは、非常にむずかしいといえばむずかしいことなのでしょう。つまり存在のリアリティーというものに触れる。存在が持っている一番根源的なあり方、そこに達する。そこに達するということは、私自体もそこに達していなければ、ものが持っているリアリティーというか、基礎的なところが本当にはわからない。だから自分が立っているあらゆるものの存在の一番基礎的なところ、それと今、詩に詠もうとするそのものの一番基礎的なところ、そこで自分と詠われる詩の内容とが、本当に一つになる。そういうところからポエムというのは生まれてくるものなのでしょう。「たった一つの言葉を見出だすためにどれだけ苦吟をしたか、苦労をしたか。今思うと、父親はそういうことで私に本当にいろいろと教えを残してくれ

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

たと思います」というお話をされました。詩人の息子さんとして生まれられた隆太郎さんが、今白秋全集を出しておられますが、白秋先生からいえば、本当にいい後継者を得られたのだと思いました。

そういうように、何か一つのことをするにしても、本当の自分にまず目覚めるという基本点に立たないと、あらゆることが間違ってくる。いい加減になってきます。一つの作品を読んだり、見たり、聞いたりする場合には、そこにはその作者の全人格が出ているはずなので、その立場に立ってみないと本当の理解ができない。そういうことを言い出せば、何も手をつけられないではないかということになるかもしれませんが、年相応に、学生の時は学生として理解すればいい。そのことに気をとめていると、だんだん深みがわかってきます。同じものを読んでも、学生時代に読んだ読み方と、社会生活をした後での読み方とでは、その味わい方は変わってきます。深みが出てきます。ですから私は、人生というのは最後まで無限の歩みだと思います。無限に深まっていくことのできるものだと思います。

また話がとびますけれども、久松先生は「平常心是道」、平常の心、それが道なのだと教えてくださいました。中国にも『礼記』の中でしたか、中庸編のところに、「道は須臾も離るべから

ず。離るるものは道に非ず」という言葉がございますが、道というのは、ただ過去から未来にわたって踏み固められて続いているというだけのものではない、そこから私を貫いている中心的なもの、それにいつもいつも触れて、いつもいつもそれと一つになって生きていきたい、これが道というものだろうと私は理解しております。

久松先生は肉体的には昭和五十五年に亡くなられて、やがて十年になりますけれども、私の心の中にはちゃんと生きていてくださいます。恐らく道場の人たちはすべてそういう思いで先生をお慕いしていると思います。先生は亡くなられる時、お葬式とか、弔問とか、あるいはお骨拾いとか年会とか、そういうことは一切無用だと、はっきりと遺言をして亡くなりました。家族の方もその遺言を守られまして、いまだにお墓はございません。

末期にこんな歌を作っておられます。「わが墓碑は碧落にたて碑銘をば　ＦＡＳと深くきざまん」。碧落というのは大空という意味です。碑銘というのは墓に刻む文字です。ＦＡＳというのは、先生がアメリカからヨーロッパをお回りになった後で、学道道場という名称をやめてＦＡＳ教会という名前に変えられた、そのＦＡＳです。

Ｆというのはフォームレス・セルフ。フォームというのは形です。フォームレス、つまり形

を持っているけれども私自身はそんなところにはいない、というフォームレス・セルフ。そのフォームレス・セルフを中心として、横にオール・マンカインド。つまり、全人類の立場に立つということです。フォームレス・セルフの立場は、当然、全人類の立場になるわけです。そこから初めてスーパーヒストリカル・ヒストリー、超歴史の歴史が生まれる。つまり、歴史を超えて歴史をつくっていく。その三つの頭文字を取って、先生はＦＡＳと名づけられました。いまではＦＡＳ教会と申しております。

足利紫山老師のお弟子で、河野宗鑑という方が、愛媛県の大乗寺というお寺におられまして、私は昭和二十四年にその方からお手紙を頂きました。「今度、久松真一先生が、愛媛の仏教会の招きで講演旅行に来られることになったから、あなたもぜひお供していらっしゃい。足利紫山老師にも、宇和島でお目にかかることができると思いますから」ということでした。私もいい機会だからと思いまして、先生に「お邪魔かもしれませんけれども、お供させていただいてよろしゅうございますでしょうか」とお尋ねしましたら、どうぞとおっしゃってくださいましたので、私と、前から決まっておられた横井聖山さん、今は柳田聖山とおっしゃいますが、その方と二人して四国へお供したことがございます。

最初に松山の正岡子規にゆかりのある正宗寺というお寺でお話をなさいまして、それから愛媛県を横断するかたちであちこちのお寺でお話をなさりながら宇和島まで行かれました。朝、講義をなさり、午後からまた講義をなさって、その後皆さんが先生の書のお上手なことをよく知っているものですから、お軸にする大きな紙を何枚も何枚も持って来て「書を書いてください」と言われます。先生は一気に書かれる方ですけれども、それでもあまりに枚数が多いと、夜十二時ごろまで書いておられました。私は「先に寝ませていただきます」と言って、さっさと寝ていました。

朝は、夏のことでしたので五時くらいには明るくなります。その頃に私が起きると、先生はもう起きて散歩をしておられるのです。「先生、お早いですね。昨夜はお疲れでしたでしょうに」と申しあげても、「いやあ、四時間寝れば十分ですよ」と言っておられました。これにはまいりました。私など、夜よく寝ておいても、昼間暑くて、先生の講義がむずかしいものですから、ついうとうとしたりして、あとでノートを見ると、ナメクジが這ったあとのようで読めない。そんな状態だったのです。そういう暑い最中、あれで五日か一週間でしたか、先生は毎日、続けざまにそういう生活をしておられました。日常生活がきっちりと出来ているから、

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

他所へ行ってもそういう生活ができるのでしょう。付け焼き刃では決してできることではないと思います。

いつでしたか、先生がご病気になられた時に、村田さんというきれいなご婦人が先生の看病をしておられたことがありました。私が伺った時、村田さんは「先生が私に、あんたはよく寝るねとおっしゃるんですよ。私、たまりませんわ」と言っておられました。その時私は、先生のお看取りをしなくてよかったな、とてもじゃないが先生とご一緒には生活できないと思いました。晩年に先生がご生家の岐阜へお帰りになりました時に、藤吉慈海先生が「あなた、行って看病したらどうだ」と言われましたけれども、「とてもじゃない。私なんかでは先生の看病はできません」とお断りしました。

そのように先生の日常生活というのは、日々が本当に張りつめたものでした。そして九十歳までそれを押し通されました。学者と呼ばれる方は多いけれども、先生は学問だけではない、生活そのものが、本当にまれにみる生き方をしてこられた方です。そういう意味で、まことに恐い、厳しい、それでいてまた限りなく優しい方でした。

先ほど四国の話をいたしましたが、もう少し四国の話をいたします。私は尼衆学校におりま

したが、その学校は、浄土宗に属しておりました。講義の中でよく先生は、「浄土教では、阿弥陀様と衆生ということをいう。阿弥陀様の光によって衆生が包まれるとか、あるいは慈悲を受けるとか、それによって救われるとか、そういうように説くから、浄土教というのは他律的だといわれる。つまり自律ということからいえば、これは他律的な宗教だ。そういう他律ではだめなんだ。どこまでも自律と他律というものをアウフヘーベン、つまり使用して、そして本当の自律にならなければうそだ」と浄土教を批判しておられました。私にはそれが腑に落ちなくて、先生はあんなことを言っておられるけれども、先生の浄土教理解はちょっと間違っているなどと、生意気なことを考えておりました。

四国へ行きました時に、たまたま道後温泉へ行ったのです。温泉で湯を浴びた後、ぶらぶらと散歩していました時、宝厳寺という、一遍上人の木像のお祀りしてあるお寺へ行き着いたものですから、木像にご挨拶をして行こうということで、先生と三人でそのお寺に入りました。一遍上人という方は、これはまたお念仏を申された方ですから、先生がどのようなご挨拶をなさるのかと、私は興味津々で後ろからついてまいりました。

そうしますと、先生はその木像の前で合掌をして、そして腹の底から「南無阿弥陀仏、南無

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

阿弥陀仏」と十念を称えられたのです。私はなんとなくほっとすると同時に、やはり、というような、わかったような気になったものです。先生の教えの中では、自律ということが非常に厳しく言われました。当然、人間は動物のようにただ盲目的に、置かれた場所で生きていくものでもございませんし、あるいは神様のように、完全円満であって今さら生きるとはどういうことかというようなことを考える必要のない立場でもございません。人間は半分は動物的ですけれども、「考える葦」とパスカルが言っておりますように、弱い葦ではあっても、考える能力を持っています。とくに近世デカルト以来、「考える、故に我あり」という、理性の立場にあることが強調されています。

何かに頼って、何かの影響を受けて生きていくという生き方。それが何か超自然的なものであろうと、あるいは一時流行した超能力であろうと、そういう何かに頼る生き方をする人がいます。現代人であっても、手相を見てもらったとか、家相がどうだとか、あるいは今日は吉日だから、大安だからとか言う方がございますが、そういう他律的なもの、他の支配の下に置かれるというあり方、それは本当の意味で人間としての生き方ではない。人間はどこまでも自律的でなければならない。はっきりと自覚をして生きていかなければいけない。先生は、そうい

うことを非常に強調してこられました。

私は浄土教というものも、決して他律的ではないと思います。そう思いますが、先生の言われる自律ということの意図はよくわかりましたので、それはなるほど自律でなければいけないと思います。そして私は先生のいろいろなご発言によって、自分の選んだ道は間違っていなかったと、はっきりした確証を得たというか、安心したというか、「ああ、よかったなあ。自分の選んだ道は本当にすばらしい道だったんだ」ということを、先生によって証明されたように思ったのです。

先生の厳しさと優しさということを、非常によく表していると思えるエピソードがございますので、それをお話しさせていただこうかと思います。

先ほど申しました心茶会の同人のお一人に、今、神戸大学の先生をしておられる倉沢行洋という方がおられます。その方がいつか言っておられました。心茶会では錬成会、つまり修業をしていく段階で自分たちのお点前でお茶を一服さし上げようという会ですが、その錬成会をしようという時に、いわゆるお茶会をしようと思われるからでしょう、費用が足りなくて、これではお茶も買えないし、お菓子も買えない、さてどうしたものかということで、役員会が開か

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

れました。そこで、「一般のお茶会と同じようにお茶券を売ろう」という話が持ち上がったそうです。

その時に一言、先生のお耳に入れておかなくてはというので、久松先生のところに行って「このたびの錬成会はお茶券を売ることにしました」と言われたそうです。すると先生が、「心茶会の精修ともあろうものが、なんということですか」と一喝されたそうです。「世間のお茶とは違うでしょう。あなたたちはなんのためにお茶を学んでいるのですか。ただお茶を点てて出すだけ。それはそうかもしれない。しかし、お茶を通して精神修養をする、自己を確立していくというねらいを持って心茶会は発足している。それなのにお茶券を売るという世間のありようを取り入れるとは、全くなっていない」と先生はお叱りになったそうです。その時先生は「お茶がなければ白湯を出せばいいではないですか。お菓子がなければカヤの実でもなんでもあるじゃないですか」と言われた、ということです。

そこに非常な厳しさがあります。世間的な、世間におもねるような生き方、それをどこまでも排除していく。世間に堕していく生き方への批判。それが先生を貫いているので、そういう言葉になって出たのだと思うのです。当日を迎えますと、先生がこっそりと金一封を包んで、

「これでお茶とお菓子を買いなさい」と言って渡してくださったそうです。先生はそういう方だったのです。ただお叱りになるだけではなくて、その背後には本当にやさしい、すべての人類を目の中に入れてしまっても痛くないという、そういうやさしさ、限りないやさしさをお持ちだったのです。

限りない厳しさと、限りないやさしさ、それは一つだと思います。普通、やさしさという時は、何か人におもねるようなやさしさをいいます。そこにはあの人がこういうふうに思ってくれるだろうから、こういうふうにしようかという打算があったり、意識的に一人の人に親切にしようと思ったりするのが普通のやさしさというものでしょう。それでもつっけんどんであるよりはやさしいほうがいいでしょうが、そこに本当に厳しさを持っていないと困るのです。ただやさしさだけで、ふにゃふにゃになってしまうというのでも困ります。そうかといって厳しさだけで誰をも寄せつけない、そういう厳しさだけを貫いていくというのも困ります。限りない厳しさの場に自分が立つことができれば、これはまた限りなくやさしく人に対応することができます。そういうのが本当の自分なのです。

ですからこれは誰でも、どこにいても、何をしていても、本当は目が覚めればわかるのです。

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

ただみんなそれに目を暝るというか、そういうことを少しも考えないでいるだけです。世間的なコマーシャリズムにのせられて、あれが美しいとか、あれがいいといわれるとそちらに走っていき、また違ったものがいいといわれるとそちらに走っていくのです。あるいは、現代は非常に科学的な時代ですが、その中で最近はミスティシズムというのか、神秘的なものにあこがれる風潮が出てまいりまして、短絡的に占いであるとか、まやかしものに走る。そういうものはすべて他律的なものです。他の力に動かされていき、自分というものが全くない。それだけではいけないのです。自分というものをはっきりと見つめて、自分は自分なんだと、自分の個性を生かしきらなければならないのです。それと同時に、他人のこともちゃんと考えて、すぐ相手の立場に自分を置けるような自分、どの人に対しても、その人の立場から自分を見ることのできる自分、そういう自分になることです。それは豊かな、広い視野を持った、あるいは無限の深さを持った自分です。そういう自分になっていただきたい。一人一人がそれを心がけていただきたいと思います。

私もいろいろな体験から、本当の自分ということがわかってきました。皆さんは、そこまで考えるチャンスをなかなかお持ちになれないと思います。例えば、美人の人は私は美人だとい

う自覚をお持ちでしょう。その人が顔に火傷をして、折角の美しさが壊されてしまったというようなことがあると、その人は多分、悩むと思うのです。「私はあんなにきれいだったのに、どうしてこんなことになってしまったのだろう。こういうことさえなければよかったのに」というような悩みが出てくると思います。

その前に、私たちは一つのこういう身体を持ったもの、これが私だと思っていますが、一体私というのは何でしょう。形を持ったものがもし私とすれば、頭が私なのだろうか、あるいはボディーが私なのだろうか、あるいは手足が私なのだろうか、一体何が私なのだろうかというように次々と考えていきますと、だんだんわけがわからなくなります。私というものは物にだけではなくて、人にも触れます。あらゆるものに触れていますが、その触れている面の内側だけでなく、外側も実は私のはずです。それは、自分は自分が一番よく知っていると思っていても、外から見ると、また違った面が見えてくる。形の上だけから見ても、そのように本当の私というものは捉えにくい。なかなかわからない。一体何が自分なのだろうか、本当によくわからない。ある意味からいうと、自分ほどわからないものはないといえます。

それが今いいますように、形ということからいえば、その形が崩れていくことに対して悩み

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

を持つと思うのです。皆さんは入試競争の中で大学に入ってこられた方たちですが、社会的な立場からいえば、この人は選ばれた人であるとかそうでないとか、この人は社会的に地位が高いとか低いとかいう見方をして悩み、苦しみます。また、例えば火事で財産がなくなってしまったとか、あるいは美しいもの、立派なものを失ってしまったとかいう時にも、悩みとか、苦しみとかを味わいます。

もっと精神的なことをいえば、自分の頼りにしていた両親が亡くなってしまうとか、あるいは母親が最愛の子どもを失うとか、愛していたものを失う心の痛み、それは傍の者ではわからないほどの苦しみ、悩みだと思います。それは、そういう物質であろうと、社会的なものであろうと、あるいは精神的なものであろうと、何かを想定してというか、何かに私たちが執着をして、それにしがみついていて、それがなくなったために、私たちは悩み苦しむのです。しかし、本来、何もなかった。私自身も本当はないものだ。自分自身、形もない、姿もない、何ものでもないという自覚を自分で持っていれば、何かを失っても、本来ないものは別に失ったことにはならない。それを私たちは、すべてのものがあると思っているから、何かを失うことになります。それが傷つけられると悩むことにもなるのです。

本来はそうではないのです。たとえば、赤ちゃんが生まれたての時には、ものが見えているのか、見えていないのかわからないようなぼんやりとした目で見ていますが、そのうちに少しものがはっきり見えてくると、母親の顔を見た時に目の色が変わります。お母さんだという喜びのようなものが目にはっきりと表れて、輝きが出てくる。意識はないけれども、何かが出てきている。そういうことは何も赤ちゃんだけではなくて、すべての人が本来は形がないのにこういうような形をとって、この世の中で生きて働いているのです。けれども私たちの日常生活では、子どもの時から意識的にものを見たり考えたりするということが当然になっていますので、意識することをやめなさい、考えることをやめなさいといえば、何だかばかになるように思ってしまうでしょうが、そうではないのです。本当は、形のある限定された私というものはその表れにすぎないのであって、私というのは本当はもっともっと深い、目に見えないところで、形のない自由な世界で、もう何もさまたげることのない世界で、動いたり、あるいは人間関係をつくっていったりしているのです。そういう自由な何のさまたげもない、形のない世界に立つこと、それが目を覚ますということなのです。

夢を見る時、夢の中で一生懸命にあの人がこうしたとか、あるいは誰かに追いかけられてど

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

うしようと思ったとか、いろいろなことがあっても、目が覚めてみると、全部が夢だったということがあります。夢の中では、いくら意識していたとしても夢であるということがわからない。それが現実だと思って、追いかけられて一生懸命に走ってみたり、恐いと思ったり、そういう思いを持って行動しているのです。それが目が覚めてみると、あれは夢だったとわかる。それがいい夢であれば、もっと見たかったなあとなるでしょうし、悪い夢なら、夢でよかったなあということになるのでしょうが、目覚めてみて初めてあれは夢だったのだということがわかるわけです。

ちょうどそれと同じように、形のない自分というものに本当に目覚めた時には、今までの生き方では本当に自分というものがわかっていなかったのだということがわかるのです。なぜそういうことが必要かといいますと、実は、生きるということの根本にそれがあるのです。それがわかっていると、象が一歩一歩大地を踏みしめて歩いていくように、本当にしっかりと生きることができる。生きるということの根本から生きることができる。その生きることの根本というのは、私だけが中心になって生きるということではなくて、形のない深いところでは、私があなたであり、あなたが私であり、あの人も私であり、世界のあらゆる方が全部私なのだと

いう立場に立てるのです。そういう立場から初めて、全人類というものを自ら背負って立つということが起きるのです。

最近、平和ということがよくいわれます。平和、平和といいながら、平和を叫ぶグループが二つに分かれてけんかをしているとか、言い争いをしているとか、それがなかなか一つにならないとかいうことがあります。夏になって広島・長崎の原爆の頃になると、平和運動が一つにまとまらないことがよく問題になりますが、それは本当に自分が平和になっていないから、口先で平和と言っていても、結局そこに見解の相違が生じて、お互いに立場を譲らず、なんのためかわからないような平和運動になってしまうのではないかと思います。平和というのは、自らがまず、自分は形がないというところに立って、その自覚を持てば、おのずから周囲の人たちを平和に導いていくことができるのです。自ら平和にならないで平和、平和と言っても、それは口先だけのことです。ですから自らがまず平和になることが肝心です。

私は戦争を境にして、ある意味で過去の一切を捨て去りました。その意味からいうと、平和を象徴しているといえます。平和を自ら実現するということのために、こういう世界に入ったともいえると思うのです。とにかく、人からどれほど理不尽なことを言われ、怒られても、

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

「はい、さようでございます」と言ってにこにこしていられる。怒るということが全くない自分になる。これは仏教のほうでは初歩のことでございますが、そういうことから始めまして、本当にどんなことがあってもくじけない、どんなことがあっても恐れないという自分を打ち立てていく。これが生きるということの意味なのです。生きるということを本当に自覚すれば、そういう生き方をせざるを得なくなります。生きるということと、そういうことを自覚するということは、一つなのです。

われわれ人間は他の動物のように、置かれた場所で盲目的に満足しているというわけにはいかない。知性を持って、何かを追いかけ、何かを見出し、納得していく。これは人間に与えられた宿命といえます。人間とは本来そういうものなのです。そういう中で、本当に生きる意味、自分が生きていくということはどういうことなのかということを考える時期があります。私はやはり二十歳前後がそういう時期だと思います。皆さんは卒業してビジネスの世界に入ってしまえば、毎日、毎日あたふたした生活になり、そういうことを考えている暇がなくなるかもしれません。学生時代は、ある意味からいうと、自分というものをはっきりと考えてみる、そして自分がどういう生き方をすればいいのかをはっきり自覚する時だと思います。自分を追求し

て、それを自分の外側に向かって追求するのではなくて、自分の内側に向かって追求するのです。

「啐啄同時」という言葉があります。これは親鳥が、卵の中のヒナが殻を破って出る時期を感知していて、外から卵の殻をコツコツつついて割ろうとするのと、内側からヒナがそれこそ黄色い嘴で、力は弱いのでしょうがコツコツとつつくのと時を同じうした時に、はじめてそのヒナが生まれ出てくる、それを啐啄同時という言葉で表現しているのです。自分がわかる人というのは、そういう人をいうのでしょうか。ある意味からいうと、誰でもわかるはずのことなのです。それがわからないというのは、何かそこに自分とはこういうものなのだという一つの思いを持っている。自分に頼る何かがあるとか、自分は容姿がいいとか、財産があるとか、背景がしっかりしているとか、何かそういう一つのものにすがりついている時には、それは聞いてもなかなかわからないかもしれない。けれども、皆さんが本当に生きているということは、今言ったように形もない、何の妨げもない自由自在の世界を生きていることです。それがはっとわかった時、それが啐啄同時なのです。

ですからいくら一方的に話をし、話を聞いても、ピントが合わずに話がぼやけてしまうとい

うようなことでは、それはわからないでしょうが、ピントが合って、はっと気がつけば自由自在な生き方ができるようになります。何にも妨げられない、地位がなくても結構、名誉がなくても結構、財産がなくても結構、自らの足で、しっかりとなんの恐れもなく生きていけるという自分になる。これはすばらしいことなのです。

皆さん、自由がほしいとか、自由でありたいとかおっしゃいます。寄宿舎にいる方ですと、その寮の規則に縛られるのがいやだと言い、規則に縛られないことをもって自由とお考えになっています。そうとすれば、それは自由のはき違えです。それはただのわがまま勝手ということなのです。自由を求めるという場合に、何をしてもいいのだという自己のエゴイズムをそのまま出していきがちです。エゴイズムを自由とはき違えることはよくあることなのです。

形のない自分というものに気がつけば、これは何の妨げるものもないわけですから、自由自在に行くところすべて障りがないという生き方ができるのです。だからそういうことを卒業までに少し考えていただければ、本当に皆さんの人生にプラスになると思うのです。

あまり時間がございませんが、もう一つ付け加えておきたいのは、女性はとかく人に頼りたがるというか、愛されたがることはあっても、自分で愛していくという立場にならないという

ことがあります。愛されるよりは、自ら進んですべてのものを愛していく。つまり受け身ではなくて、自分が主体的に動いていってほしい。これをとくに私は、皆さんに言っておきたいと思います。最近自立ということがいわれ、あるいは女性学、ウーマン・リブレーションということもいわれて、そういうことに目覚めてきておられる方も多くなってきていますが、われわれの学生時代は、大学でも、女子大にしか入れませんでした。女学校時代の教育も、その当時の男子の中学校に比べてレベルが低く、いろいろと差別を受けてまいりました。私には兄がおりましたので、中学でこんなことを学んでいると聞かされると、私たちはそんなことは学んだことはなく、悔しい思いを持ったことがありました。そうしたこともあって、なんとか自分というものを確立していきたいという気があったのです。

今の方たちを見ていますと、あまりにも生活が恵まれすぎて、生まれた時から冷暖房も完備されていますし、生活環境もいいし、なんのハングリー意識も持たずにぬくぬくと育っておられます。そういう方たちは多分、もうこのままでいいと思い込んでおられると思います。中にはまだまだ自分たちは本当に自立できていないと思っている方もあるかもしれませんが、そういう方のほうが人数が少なくて、どちらかといえば、シンデレラのように、このままいいとこ

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

ろにお嫁に行ってぬくぬくとした生活をするというようなことが希望であり、それを目標にしている方のほうが多いのではないかと思います。

もちろん、そういう恵まれた一生を送る方があってもいいと思います。悩みや苦しみをわざわざ求めなくてもいいではないかと言う方もおられます。しかしやはり、考えるということを与えられた人間ならば、ぎりぎりまで徹底的に追求して、自分というものを究めていくのが本当の生き方だと思います。そういう時期がちょうど二十歳前後だと思います。

私が京都におりました頃は、まだ三高がございました。三高のバンカラといって、破れ帽子の、それも油でぎらぎらした汚いのをかぶって、着物を着て、袴をはいて、カラコロと高下駄の音をさせて「紅もゆる」という、あの吉田山の寮歌を歌いながら町なかを歩いている光景を見たことがございます。当時の三高の学生は、ちょうどものを考える時代で、それこそ学問よりは人生問題を討論して、どういうように生きるかということをみんなで議論し合うといういい時代を持っていたのです。

今はそういうこともなくなってしまい、皆さん受験勉強に追われて、どの大学に入ろうか、そしてそのあとどういうところに就職しようかということに血眼になるという、そういう現実

面だけが重視されて、自分を本当に深めていくという方向が薄れてきてしまっているように思います。けれども、本当をいえば、人間として生きてきたという、あるいは生きていくということは、自分が納得をして生きる、その納得というのは、本当に自分は自分であると同時に、自分は人類の原点に立っているという大きな深い自分、それに目覚めて生きるということなのです。

男の先生方は女子学生の無邪気な姿を見ると、「今はそれでいいですよ」と言いたくなるとおっしゃいます。私も中村孝也先生という歴史の先生で東大から講義に来ておられた先生から「皆さんを見ていると、本当に若くて、いきいきしていて、それでいいですよ。何か聞きたいことがあれば題を出してください。私はその題について、五分で話をしろというなら五分で、一時間でというなら一時間で、どんなふうにでも話をしますよ」というような、初めから甘く、甘く見られていたように感じる講義を受けたことがありました。その先生は東大で金メダルを貰ったという非常に優秀な先生でした。だからこそ女子大などに来ると、初めから雰囲気的にも違っていたのか、何か甘く受け取られてしまったという感じを私は持ったのです。この大学ではそういうことはないと思いますが、私は同じ女性ですから、つい辛口になってしまうので

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

しょう。

最後になりましたが、西田幾多郎先生の歌に、「我が心深き底あり喜びも　憂いの波もとどかじと思う」というのがあります。われわれの心の中には、感覚的にうれしいとか悲しいとか、いろいろな思いが浮かんでまいりますが、そういう感覚、意識というものの届かない、深い心がある。そういう心は一体どういう心なのか。「我が心深き底あり」、深い、本当に底のない奥深さがある。そこからいろいろな思いも起こってくる。意識も起こってくる。感情も起こってくる。その心を掘り当てていただきたいと思います。

また、こういう歌もございます。これは斎藤茂吉の『赤光』という歌集に入っています。「赤々と一本の道通りたり　魂きはる我が命なりけり」。「魂きはる」というのは命にかかる枕詞です。一本の道、それが赤々と命を照らしている。先ほど言い足りなかったのですが、ものの音を聞くとか、ものを見るとかいうことは、実をいうとそのもののほうから私のあり方、存在そのものを、本当は赤々と照らしていてくれる。そういう場を私のほうに開いていてくれる。それにこちらが気がつかないと、いわゆる相手から見すかされているということになりましょうか。

私が初めて久松先生のところに一人で伺った時、私が出てしまうまで先生はくぐり戸のところでていねいにお見送りしてくださっていました。私はもちろん小さな器ですし、年齢的にいっても向こうはもう醸熟されたお齢で私は若僧でございますから、先生から射すくめられるというか、見通されるというか、そういう恐いものを感じたことがあります。しかしそれは、自分が出来ていないからです。自分が先生と同じような立場に立つことができれば、どんなに若僧であろうと、どんなに境涯が違おうと、本当は堂々として立ち向かえるのでしょう。

いろいろな私の体験を通してまとまらないお話をしてまいりましたが、時間のようでございます。お疲れさまでございました。ご静聴有難うございました。

――一九八九・一〇・三〇――

『真實心』第十一集平成元年度1990年3月発行（京都光華女子大学）

正誤表

本文に下記6カ所の誤りがあり、お詫びして訂正させていただきます。

箇所	誤	正
P201　2行目	近藤徹称	近藤徹稱
P209　4行目	閑坐実究	端坐実究
P222　8行目	年会	年回
P223　6行目	FAS教会	FAS協会
P223　7行目	河野宗鑑	河野宗寛
P229　5行目	精修	清衆